

夕焼けの赤

よしかわ ひまり
吉川 陽葵

ある日の夕方、何気なく空を見上げた。西の空がゆつくりと染まり、街の輪郭が静かに影へと沈んでいく。その色はやわらかく、一日の無事をそっと知らせるようだった。私はその赤を何の疑いもなく夕焼けだと思っていた。けれど、この赤を安心して見上げられるということが、どれほど特別なことなのかを考えるようになった。私は戦争を体験していない。爆音におびえたことも、炎から逃げたこともない。それでも今、こうして穏やかな空を見られるのは、過去に深く傷つきながらも「過ちを繰り返さない」と決めた人々がいたからである。私の見ている夕焼けは、その選び直しの先にある。

赤い空はいつも穏やかな意味を持っていたわけではない。かつて、空が燃えるように赤く染まった夜があつた。遠くから見れば夕焼けのようだったかもしれない。しかしそれは、焼夷弾の火だった。同じ赤でもそれは安心の色ではなく、暮らしや命

を奪う炎の色だった。同じ空、同じ色。それでも、その意味を決めるのは人の選択である。怒りや無関心が重なれば、赤は破壊の色になる。互いを思い、違いを受け入れ、立ち止まって考え続けるなら、赤は穏やかな夕焼けの色であり続ける。平和とは完成した状態ではなく、その選択を重ねていく営みなのだと思う。

今も空は赤く染まっている。その色を見上げるたびに、私は二つの意味を思い出すだろう。穏やかな夕焼けの赤と、かつて街を覆った炎の赤である。同じ色であっても、その意味を決めるのは私たちの選択である。だから私は、この空の下で、この赤を安心の色であり続けられる選択をしたい。過去に「繰り返さない」と決めた人々の意志を自身の生き方の中で受け継いでいきたい。そして、何気なく見上げるこの赤が、いつまでも穏やかな夕焼けであってほしいと心から願っている。